

## 禅室

元興寺の禅室は、現在は無人だが、何世紀にも渡り学僧の居住地となっていた。極楽堂同様、元々は2棟の巨大な寮のうちの1棟であった。禅室は、11世紀末から1244年にかけて、一棟の建物の一部を少しずつ改築して作られたものである。軒先の庇（ひさし）の開口部など、現在の建物の形は、当時流行した寺院建築の「大仏様式」を反映している。しかし、禅室は、元興寺の前身である宝光寺の材木や瓦を再利用して建てられた部分があり、それは588年にまでさかのぼるものである。

禅室が宿舎として使用されていた当時、内部は東西に4つの房と呼ばれる単位に分かれていた。各部屋の中央には扉があり、その両脇には現在も残っている大きな格子窓がある。各房は北、南、中央の3つに分かれ、北側はさらに3つの坊に分かれており、それぞれの坊を複数の僧侶が使っていた。このような配置により、1人の僧侶が1.5平方メートル強のスペースで寝起きし、勉強することができた。位の高い僧侶にはもう少し広いスペースが与えられたと思われるが、基本的には厳粛な生活を送っていたとされている。現在は仕切りが取り払われ、木製の柱が並ぶだけの空間が広がっている。建物の北面と南面が少し異なっている。南面には格子状の広い窓があり、より多くの光を取り入れることができ、下級僧たちが室内で勉強できるようになっている。一方、北側には小さな窓があるが、これは年配の僧侶がこの区画を暖かく保つためだったとされている。禅室は、中央の暗い部分が瞑想する場所である。